お仏壇には“生きる秘訣”がいっぱい

仏教大好き職人がお届けする

まごころ南無レター

24号 2026年7月発行

◆お仏壇の修理・掃除・洗浄・塗替え・買換え・移動・保管・処分 ◆お仏具・お数珠・寺院関連・おみこし・掛軸などの修復

お仏壇の事でお困りの方がいらっしゃいましたらぜひご紹介ください！

毎日更新中ブログ ◆広島県全域対応◆出張お見積り無料

仏壇 音羽屋 検索

音羽屋

広島市中区舟入南3丁目13-1 FAX 082-942-0526

〈お問合せ〉受付／午前8:00～午後7:00 TEL 082-231-3721

今回の「南無レター」はいかがでしたか？皆様のご意見・ご感想をどしどしお寄せください。
ご連絡用LINEからメッセージを頂けると嬉しいです！
こちらからどうぞ➡

右の写真、何だか分かりますか？これ、**陶芸用の土**なんです。あるお客さまが作られたステキな陶器のカップを見た瞬間・・・「やってみたい！」と思い、その陶芸クラブへ入部することに。さて、ヤマケンの新たな**感性**は磨かれるのでしょうか？その前に、ちゃんと**完成**するのか！

代表の山縣（やまがた）（あだ名はヤマケン）

日頃からお仏壇を通じて、皆さまの「暮らし」や「大切な記憶」にふれる機会を頂いていますが、先日、ある講演会の動画を見て、**「固定観念」**が大きく揺さぶられる経験をしました。

講演会で講師をされていたのは、僧侶としては珍しくご遺体の運搬から着替えまで、全てをご自分でなさってこられた高橋卓志氏。その42年間の思いを語っておられました。

―講演タイトル―
生き方のコツ 死に方の選択

講師：高橋（たかはし） 卓志（たくし） 氏

1948年生まれ。実家の神宮寺（じんぐうじ）（長野県松本市、臨済宗妙心寺派（りんざいしゅうみょうしんじは）、平安時代創建）を継ぎ、**「仏教界の革命児」**として、既存の形式にとらわれない手作りの葬儀や、死生観に基づいた「いのち」への向き合い方で知られ、NHK「プロフェッショナル 仕事の流儀」など多くのメディアで紹介。また、「チェルノブイリ・子どもの基金」など多くのNPOを立ち上げ、在宅死を支えるネットワークの構築など、宗教の枠を超えた社会活動に長年携わり、永六輔さんや筑紫哲也さん、谷川俊太郎さんとも交流が深い。42年つとめた神宮寺を世襲せずに次の代に譲り、現在は末期ガンの闘病を乗り越え、執筆活動を続けている。著書「寺よ、変われ」「さよなら、仏教」「死にぎわのわがまま」他多数。

高橋さんは42年間で累計5000件近くの葬儀を執り行ってこられました。そのなかで、もっとも印象に残ったのは、親友・鈴木さんのご葬儀だったそうです。千葉の図書館に勤める鈴木さんは、「カリスマ司書」と呼ばれ、何事も全力で楽しむ型破りな感性の持ち主。神宮寺の檀家でもあり、若くして責任役員も務め、公私ともに深い信頼関係にありました。

鈴木さんは、メラノーマ（悪性黒色腫）を患い、脳への転移を経て、48歳という若さで死に直面。彼は入院先（東京）に高橋さんを呼び、**「自分の葬式をやってほしい」**と依頼。その数か月後、訃報を受けた高橋さんは、夜中に長野からタクシーを飛ばして駆けつけます。深夜2時に到着、自ら鈴木氏の遺体に、彼が愛用していた作務衣（さむえ）を着せ、死後のケアを行い、葬儀は要望通り、彼が愛したハヶ岳の麓にある山荘で行われました。

そこでは、花の代わりに、彼が一生をかけて愛した大量の本が祭壇として並べられました。さらに、お別れの会では鈴木さんが生前に撮影したビデオメッセージが上映され、参列者に直接感謝を伝えました。鈴木さんの奥様は、この別れの儀式を通じて**「夫がどのように生きたか」**を再確認でき**「彼の物語はいつまでも続くのだ」**と深い救いを得たそうです。

高橋氏が唱える「大往生の10ヵ条」

①生きることは死ぬことより大変だと知る
②先人の死に方をよく見ておく
③終活はやめる
④死とは何か？を真剣に考えない
⑤いい「かかりつけ医」を確保しておく
⑥死ぬ前に大好きな場所に移住しておく
⑦大往生する姿を家族に見せつけて死ぬ
⑧葬式をお坊さんや葬儀社に任せない
⑨簡単にお墓に入ろうと思わない
⑩オレの大往生は誰も真似できないと自信をもって死んでいく

↓詳しくはコチラ↓

高橋卓志 生き方のコツ死に方の選択 検索

【講演会動画のご紹介】
深いテーマですが、笑いが多く分かりやすいので機会があれば是非ご覧ください。

高橋氏の話しから感じたこと

死は通過点に過ぎない。死によって全てが終わるのではなく、葬儀を通じて故人の生きてきた時間を再確認することで、その物語は死後も続いていく。悲しみを超えた先… 葬儀は単なる悲しみの場ではなく、生と死の境界を整理し、故人が**「どのように生きたか」**を明確にする場であり、人生の違いを反映する時でもあるということ。**「100人の人生があれば、100通りの別れ方があるはずだ」**という考えに深く感銘を受けました。

僕が体験した「僧侶のいない葬儀」

鉄道好きだった義兄の時刻表と所属していた合唱団の指揮棒

2024年11月、妻のお兄さん（50歳）が事故で他界しました。あまりにも突然のことに僕たち夫婦も戸惑いばかりでした。妻の実家は大阪で、義父は9年前にガンで他界、義母は脳出血で車いす生活となり、広島で一緒に暮らしています。その当時、義理の兄夫婦は、岡山県の西粟倉（にしあわくら）という山奥に移住していました。「お葬式をどうするか？」という状況の中、お義姉さんの希望は、「生まれ育った大阪で、みんなで見送ってあげたい」というものでした。葬儀会館を予約して、岡山から大阪へ遺体を搬送。会場の方と相談をして、**お坊さんを呼ばずに「お別れ会」**という形式でお葬式を執り行うことに。

妻の実家にある桜の枯葉を飾りました

伝統的な世界に身を置く僕にとって、最初は少しの違和感や**「本当にこれでいいのだろうか」**という迷いがあったのが本音です。「お葬式とはこうあるべきだ」「お経をあげてもらわなければ成仏できないのではないか」という**固定観念**が、自分自身の中に強く根を張っていたことに気づかされました。しかし、義兄の好きだった音楽が流れ、思い出の品々に囲まれながら、涙だけでなく笑顔でおしゃべりをして義兄の思い出を語り合う時間を過ごしたとき、その違和感は消え去っていました。形式は違えど、そこには確かに義兄の**「物語」**が続いており、残された私たちも前を向く救いを与えられたのです。まさに高橋さんが仰る**「寄り添う作業」**を、私たちは家族の手で必死に模索していたのかもしれません。

高橋さんは、大往生を**「生まれてきてよかった、生きてきてよかったと思いながら死ぬこと」**だと語っていました。そのために大切なのは、「自分らしい生き方」「自分らしい死に方」「大好きな場所」「大好きな人たち」に囲まれて最期を迎えること。ラストは、茨木のり子さん（詩人）の**「自分の感受性ぐらい、自分で守れ。バカものよ。」**という言葉で締めておられました。固定観念に流されず、自分で考え、自分で感じ、自分で生きることの大切さ。

自分も相手も、それぞれの感性があり、それを受け止めあえるようになりたいものですね。

ととのいました！
感性とかけまして
僕のオデコととく、
そのこころは。
どちらも磨くとヒカルでしょう！

お年玉クイズのプレゼントをお渡ししました！

ニックネーム「ちょろりんこ」様
おめでとうございました！